別紙様式第１０

学位論文審査結果の要旨

博士課程 (甲)・乙	第　　号	氏　名	古川　貢之
審査委員		主査氏名	北村和雄
		副査氏名	恒吉勇男
		副査氏名	日高勇一

［論文題名］

虚血性心筋症に対する左室形成術後中期遠隔期成績に術前右心室機能の及ぼす影響に関する検討（英文題名：**Significance of preoperative right ventricular function on mid-term outcomes after surgical ventricular restoration for ischemic cardiomyopathy**）

General Thoracic Cardiovascular Surgery, 2019 Nov;67(11):925-933. doi: 10.1007/s11748-019-01123-5.

［要　旨］

右室機能（RV fractional area change：RVFAC）は心不全の予後不良因子として知られ、近年、冠動脈バイパス術や僧帽弁手術などの予後規定因子とする報告がある。しかし、虚血性心筋症（ICM）に対する左室形成術（SVR）手術成績との関連についての報告は少なく、本研究では右室機能の SVR 手術成績に及ぼす影響を検討した。

2010 年より 16 年 3 月までに ICM に対して待機的 SVR を施行した 19（男性 17）例で検討した。術前 RVFAC と経胸壁心エコー検査値および左室造影検査値との関連性を検討したところ、RVFAC は推定肺動脈圧（R^2=0.28, p=0.04）、E/A（R^2=0.34, p=0.01）、E/e`（R^2=0.42, p<0.01）と負の相関を認めた。Dor 手術を 15 例、SAVE 手術を 4 例に行った。術後の左室収縮末期容量指数（LVESVI）は縮小し、左室駆出率（LVEF）は改善した。入院死亡は無かった。慢性期に 3 例を心臓関連死で失った。心臓関連死と入院加療を要する心不全の再発などの心関連イベント（MACE）を 10 例に生じた。

Cox 比例ハザードモデルによる多変量解析で RVFAC（リスク比=0.92, 95%信頼区間 0.86-0.98, p=0.01）と左室造影による LVEF（リスク比=0.83, 95%信頼区間 0.68-0.97, p=0.02）が有意な MACE 規定因子となった。また RVFAC35%未満（n=9）と RVFAC35%以上（n=10）で MACE 回避率を Wilcoxon 法で比較すると，RVFAC35%未満の MACE 回避率は有意に不良であった（3 年でそれぞれ 33% vs 80%, p=0.02）。

以上の結果、ICM に対する SVR は概ね良好な心臓死回避率を収めたが、特に右心機能低下例では術後心関連イベントが生じやすいことが判明した。

本論文は循環器外科の診療に有用な情報を提供できる臨床研究であり、医学博士の学位論文に値すると判定した。

別紙様式第１１

最終試験結果の要旨

博士課程　甲	第　　号	氏　　名	古川　貢之
審　査　委　員		主　査　氏　名	北村和雄
		副　査　氏　名	恒吉勇男
		副　査　氏　名	日高勇一

［要　旨］

申請論文の内容および関連領域について口頭で試験した結果、学位を取得するに値する学力を有するものと判定した。